



社会人大学院生を終えて ～そしてこれから～

秩父市大滝診療所 中村晃久（岐阜県 35 期卒業）

岐阜県 35 期中村晃久と申します。「論文を書いてみたい」、「学術的なことに興味がある」、或いはもっと簡単に「もう少し勉強したい」等、そういった思いをお持ちの方もいらっしゃるかもしれませんが、少しでもそういった思いをお持ちの先生方のお役に立てればと思い、私の社会人大学院での経験を、ここに紹介させていただきます。



私は元々、学生の時より「地域から情報を発信できる医師」を目標にしていました。私にとって、もう 9 年も前のことなので忘れていてもおかしくないのですが、当時の私の思いが週刊医学界新聞に取り上げられていましたので、これは確からしいです¹⁾。今、思うと学生らしい表現だなと感じますが、これはおそらく「へき地で勤務していても論文を作成したい」ということだったのだと思います。実際、学生のうちに少しでも論文の「読み書き」を学びたいと思い、地域医療学センターに入り始めました。多くの先生方からの御指導の下、地域で行ったアンケート調査を論文として発表することができました²⁾。この経験は私にとって大変貴重な経験となり、論文を書くことの難しさとそれ以上にその楽しさを知ることができました。忙しかった初期研修中に、自身で経験した珍しい症例についてまとめ、内科学会東海地方会の推薦を受け日本内科学会誌に報告することができましたのも³⁾、この学生の時の経験があつてのことでした。

卒後 4 年目、初めてへき地診療所に派遣され、日々の業務に忙殺されていたころ、こういうへき地で勤務していても論文を書くことができる医師を目指していたことを、ふと思い出しました。そこで、「論文の読み書き」を本格的に学ぼうと決意し、卒後 5 年目に社会人大学院に入学しました。

ここからは本当に苦勞の連続でした。私は地域の中核病院で初期研修を含め 3 年間勤務しましたが、夜間、休日の救急医療の忙しさからこの地域の救急医療システムはどうなっているのか？日本では一次、二次、三次救急医療機関が整備されているものの、本当に機能しているのか？急を要する重症患者に集中したいけれども、軽症患者の対応もしなければいけない状況に、真に医療が必要な人に限られた医療資源を効率的に届けるためには、どうしたらいいのかと考えるようになりました。調べを進めていくと、地域住民の受療行動に焦点を当てた学問分野として「Ecology of Medical Care : 医療生態学」(以下: Ecology)があることを知り、この Ecology の研究を進めていくことが救急医療システムの改善の一助になると考えました。しかし、この Ecology に関する研究は大学院の 4 年間という限られた期間では扱いきれない壮大なテーマであることが分かり、残念ながら断念せざるを得ませんでした。ここに至るまでおよそ 1 年。1 年という時間を棒にふつたと大変ショックを受け、研究から足が遠のきがちになりました。それでも、どのように研究を進めるべきか悩んでいたころ、当時、大学院の 2 年目には、自治医大さいたま医療センターにて後期研修生として勤務していました。ここでも救急医療は多忙を極め救急車は病院の外で列をなして並んでいる状態でした。それでも、新たな受け入れ要請の電話は鳴り響き、一睡もできない当直は当たり前のようなものでした。岐阜県でも埼玉県でも救急医療が忙しいのは一緒だと思っていた矢先、目に飛び込んできたものは「救急電話相談」を PR するためのリーフレットでした。まだ日本では救急電話相談が導入されていない県の方が多いですから、多くの先生方は、「救急電話相談？」って思われるかもしれません。救急電話相談は地域住民が急な病気や体調不良を感じた時に電話で医療従事者に受診の必要性や救急車を利用すべきかどうかを相談できるシステムです。救急電話相談が機能していれば不急不要な救急車を減らせるのではないだろうか、救急電話相談について関心を抱きました。救急電話相談について調べを進めていくと、未だ多くのことが明らかになっていないことが分かりました。そこで、埼玉県の救急電話相談のデータについて疫学的な観点で解析を進め、*Int J Environ Res Public Health* に報告することができました⁴⁾。このように書くと、あつという間の出来事のようにですが、実際には本当に多くの過程を経て発表に至りました。臨床の現場で生じた「自分の疑問」に対して、一定の解を得るまでに数々のプロセスを経た、この経験は大学院で得られた一番の宝でした。日々、臨床医として地域住民に向き合いながらのことですので、当然、時間的な制約があり、これが私にとって一番のハードルでした。それでも、研究を一つの形にすることができたのは、小谷和彦教授をはじめ、地域医療学センターの多くの先生方の御指導があつてのことでした。この場をお借りして、改めて感謝申し上げます。

このレターを読んでいらっしゃる先生方の中には、大学院に進学されるかどうか悩んでおられる方もいらっしゃる

ることと思います。私はそんな先生方に是非一度進学されることをお勧め致します。大学院では多くのことを学びました。しかし、学びを始めると研究の奥深さを知り、もっと多くのことを学ぶ必要があると感じるようになりました。私もまだまだ勉強中の身ですが、臨床医としての能力を獲得するのに一定のトレーニングが必要なと同様に、論文の読み書きにも一定のトレーニングが必要だと思っています。

さて、社会人大学院を修了しましたが、現在もへき地勤務を行いながら研究を継続しています。大学院で扱った研究のテーマは救急電話相談でしたが、今後は一度断念した Ecology の研究や新たな研究領域にも挑戦していきたいと思っています。このように研究テーマを並べますと、研究テーマにまとまりがないなって感じる方もいらっしゃるかもしれません。事実、私自身もそう思っていました。それでも、ある時、指導教官から「必要な人に必要な医療を届けるという点が共通しているじゃない？」と言われ、はっとしました。もともとそういった思いから生まれた研究テーマだったなど原点に立ちかえったようでしたし、何だか自治医大の建学の精神に似ているなと思い、妙に腑に落ちました。これからも初心を忘れずに、地域に還元できる研究に精進していく所存です。

最後に、研究活動に理解を示し、話相手として私を精神面で大きく支えてくれる妻、日々の疲れを素敵な笑顔で癒してくれる3人のこども達に、この場を借りて感謝の意を表します。

1. 医学書院. 週刊医学界新聞. 自ら“つかみとる”“学びを!!”自治医大「Free course-student doctor」制度. 2012; 第2964号 https://www.igaku-shoin.co.jp/paperDetail.do?id=PA02964_02
2. 中村晃久, 中村剛史, 岡山雅信, 梶井英治. 住民, 行政担当者, 医療従事者の医療へのアクセスに対する認識. 月刊地域医学. 2011;25(11): 1032-36.
3. 中村晃久, 林祐一, 矢ヶ崎裕人, 竹中勝信, 堀部永俊, 犬塚貴. Clinically mild encephalitis/encephalopathy with a reversible splenial lesion の1成人例. 日本内科雑誌. 2013; 102(12): 3223-26.
4. Nakamura A, Manabe T, Teraura H, Kotani K. Age and Sex Differences in the Use of Emergency Telephone Consultation Services in Saitama, Japan: A Population-Based Observational Study. *Int J Environ Res Public Health*. 2019;17(1):185. PMID: 31888058



大学院修了式
同期の渡辺純先生(右)と私(左)



地域住民との新型コロナウイルス感染症に関する勉強会にて

地域医療オープン・ラボNews Letter原稿募集

地域医療オープン・ラボでは、自治医大の教員や卒業生の研究活動を学内外へ発信するために、「自治医科大学地域医療オープン・ラボNews Letter」を定期的に発行しています。

<http://www.jichi.ac.jp/openlab/newsletter/newsletter.html>

- ☆ 自治医大の教員や卒業生の研究活動をご紹介ください
- ☆ 自薦・他薦を問いません
- ☆ 連絡先: 地域医療オープン・ラボ openlabo@jichi.ac.jp

[発行]自治医科大学大学院医学研究科
地域医療オープンラボ運営委員会
事務局 大学事務部学事課 〒329-0498 栃木県下野市薬師寺 3311-1
TEL 0285-58-7477/FAX 0285-44-3625/e-mail openlabo@jichi.ac.jp
<https://grad.jichi.ac.jp/>